Meine Augsburger Dialoge

江川　佳央里

１．はじめに

令和８年８月２９日から同年９月７日にかけ、尼崎市の姉妹都市であるドイツ・アウクスブルクに滞在した。本稿はその渡航記である。

なお、私は他のメンバーとは異なり、ドイツ語が好きなだけのしがない社会人である。よって、本派遣でのすてきな観光地や食べ物などの詳述は友人たちに任せ、私は主に人との関わりの観点から、アウクスブルクでの日々を振り返る。

２．モノポリーの通貨はマルク

ミュンヘン国際空港への到着は朝だった。早速アウクスブルクへ移動し、移動式遊園地や消防署の見学を楽しんだ後、ホストファミリーと合流。自家用車に乗せてもらう際、いつもの流れで左側のドアを開け、危うく運転席に座ってしまいそうになる。ファーストコンタクトに失敗した瞬間だった。

ホストファミリーの家は、事前に教えてもらっていた通り、手入れの行き届いた大きな庭を有する素敵な場所だった。庭には桃やりんごの樹があり、ミツバチたちが家の中を飛び交っていた。自家製の桃ジャムやアプリコットケーキは絶品で、滞在中の朝食はいつもジャムをたっぷりいただいた。

それだけでも初日としては十分新鮮だったのだが、この日はそれ以上の衝撃があった。なんとホストマザーの弟家族が遊びにきていたのだ。時刻は午後５時ごろ。ホストファミリーともろくに打ち解けられていない状態で、英語の通じない 10 歳くらいの子どもたち３人と一緒にモノポリーというゲームをした。このゲームはゴール地点のない人生ゲームのようなもので、寡聞にして知らなかったのだが日本版もあるらしい。昔使っていた古いボードゲームだったので、通貨単位は「SPIELMARK（おもちゃのマルク）」、子どもたちはダイス目に興奮したり、お金を誤魔化そうとしたり、負けて悔しがって喧嘩しそうになったりしていて、どの国の子どもも一緒であることに少し緊張がほぐれたような気がした。



（写真：MONOPOLY の様子）

３.『A』ugsburg と『A』magasaki

アウクスブルク滞在３日目。この日はシュヴァーベン地方の庁舎にお招きいただき、青年使節団の一員として芳名帳へサインし、姉妹都市および青年交流事業の記念品を頂戴し、歓迎のスピーチを拝聴するなど、有意義な交流の時間となった。個人的には、ドイツ訛りの「Amagasaki」がかわいく聞こえて印

象に残っている。



（写真：まっさらな芳名帳）

このころの私といえば、だんだんと耳が慣れ、会話に直接参加せずシチュエーションから推測する段階ではあるものの、ドイツ語のスピーチや学芸解説を自力で追えるようになっていた。今回は素晴らしい通訳に恵まれたため日本語だけでも不自由することはなかったが、話者本人の言葉を自分の耳で聞いて理解することに勝るコミュニケーションはないだろう。

とはいえ、これには大きな弊害を伴った。情報が一気に増えたために、以降の日々は常に頭が焼き切れそうだったのだ。毎夜夢も見ずに眠ってしまって、自室の窓から星空観察ができなかったのは心残りのひとつである。

４．歴史と祈りをつないでいくこと

ダッハウ強制収容所を見学した。絶滅収容所としての機能はなかったというが、それでも夥しい数の人々が過酷な環境の中で命を落とした場所だった。私が特に印象深かったのは、生き延びた方々が教会の建立を求めたことで、現在その敷地にはカトリック、プロテスタント、ユダヤ教、ロシア正教の施設がそれぞれ立っていた。当時私は「日本人が建てるなら神社だろうか」などと漠然と考えたのだが、帰国後、あれはむしろ『原爆の子の像』のような祈りのシンボルと理解するのが近しいのかもしれない。

また、ダッハウ強制収容所については、ホストファミリーと話した中で一番難しかった話題かもしれない。彼らは、本団員たちが同施設に関心を持っていたのか、決して楽しい観光ではないから退屈だったのではないかと気にかけていたのだ。私なりに色々感じて考えたことを伝え、皆も非常に関心を持って見学していたことを伝えると満足していたが、こんなセンシティヴな話題を英語でうまく説明するのは難しすぎる。加えて、日本同様ドイツでも戦時中のことを語れる世代がほとんどいなくなってしまったことが課題とのことである。昔、この収容所に収容されていた本人や家族などが学校などで講演をしていたようだが、年々難しくなっているという。どの国でも戦後教育の在り方を模索している途上なのだと実感した。

５．バイエルン人、とは

本プログラムの目玉の一つ、ノイシュヴァンシュタイン城やヴィース教会への遠足は水曜日のこと。この日見たすばらしい建築や景色についてのコメントは友人たちに任せ、私には帰宅後にもイベントが待っていた。ホストファミリーの隣人とのバーベキューに招待いただいたのだ。彼は警察官で、寿司が好きらしく、なんと自前の寿司酢を所有していた。最高である。

彼は英語が堪能なわけではなかったものの、たくさん話しかけてくれ、そしてバイエルン人とは何たるかについて力説してくれた。これに限らず、ホストファミリーもよく自身を「ドイツ人」ではなく「バイエルン人」と呼ぶことが多く、日本で言うところの

「関西人」に似た、土地に対する帰属意識を見出すことができた。バイエルン地方の成り立ちからしても興味深いことではあるが、何より、こういった会話に参加できたことにホームステイの意義を感じた。



（写真：おいしい肉料理）

6．職業適性と職業アイデンティティ

さて、ドイツでは、賃金をもらいながら数年かけて特定の職業に関する知識や技能を習得する「Ausbildung（アウスビルドゥング)」という職業訓練制度がある。今回訪問したのは特に困難を抱える市民を手厚くサポートする施設で、ホストマザー一推しの視察先だった。

興味深いことには、生徒は学校で単に技術を学ぶだけでなく、学内のコンビニで働くことを通じて、接客スキルや仕入れのノウハウを身につけることができるカリキュラムが整っているとのこと。聞くところによると、ドイツも日本と同様に介護職の担い手が減少傾向にあるようだが、ドイツでは最近他の業種との賃金格差がだいぶ是正されつつあるらしい。現在日本の同業種においては、スキルがなければ賃金は上がらず、けれどスキルを学ぶためには学費を納める必要がある。例えば、日本でもこの Ausbildung という制度を若者の担い手が少ない業種で限定的に取り入れることで、職業とのミスマッチを減らし、離職率を下げることに寄与するのではないかと考えるところである。もちろん原資は必要だが、人口減少が加速する中で、労働力を確保するための一つの前向きな方策ではないだろうか。

また、その日仲良くなったマリアは、とても日本語が堪能だった。日本語勉強は彼女の叔父が日本人と結婚したことがきっかけで、母国語でおしゃべりする方が相手にとって親切だと思ったから話せるように練習したと聞き、その姿勢に驚嘆の念に堪えない。後述もするが、私はこの渡航で何度も言語を学ぶ意義を実感することができ、本当に幸せである。



（写真：スーパーで見つけたかぼちゃ。ドイツでは「Hokkaido」という名で売られている。）

7．尊敬できる人々との出会い

青年使節団みんなでの活動日としては最後の日。世界遺産である『アウクスブルクの水管理システム』を見学した後、お世話になった方々とフェアウェルパーティーを楽しんだ。それぞれの青年使節団が用意したパフォーマンスも楽しんでもらえたようで、準備をした甲斐があった。

ところで、私はこのパーティーで鮮烈な

出会いを果たす。在ミュンヘン日本国総領事館の副領事 山形氏の挨拶である。彼女は私と変わらない年代でありながら国家の代表として堂々たるふるまいで、紡がれるドイツ語はあまりにも美しく、それでいて親しみやすい生きた言葉であった。彼女が話し出した瞬間、私も同卓のドイツ人ゲストたちも息をのみ、目を丸くして聞き入った。それだけ素晴らしいものであった。

そのあと、お忙しいところお時間を割いてくださったことで、今後のドイツ語学習へのよいモチベーションを得ることができた。自身の至らなさを直視するのは正直苦しいが、それを超える喜びであったといっても過言ではない。これだから語学の勉強はやめられないのだ。

８．深層心理、あるいは夢

説明したがりなのはドイツ人の気質なのだと実感した１日だった。

この日はホストファミリーデイのため、私の“深層心理”に従いウルム大聖堂への遠足へ。



（写真：ウルム大聖堂内部）

この大聖堂は、昨年サグラダ・ファミリアに抜かれるまでは世界で最も高い教会塔をもつことで知られており、大戦でも戦火を免れたという。荘厳な佇まいであった。

内部見学では、ステンドグラスの物語から建築から意匠から、ホストファミリーが端から端まで解説してくれた。現地の現地人による聖堂ツアーと合流して聖書の解説が始まった時には若干途方に暮れてしまったが、同時に「この子なら興味を持って聞いてくれるだろう」というホストファミリーの信頼も感じられ、短い時間の中で私を知ってくださったことが嬉しかった。

そんな中、ホストファーザーは、前日のフェアウェルパーティのスピーチで尼崎青年団長が触れた、尼崎市にある数多くの神社の存在は極めて興味深いという話をしてくれた。正直なところ私は、アニミズムも複雑に混じった日本の多神教感というものが一神教の信者にとっては奇妙で信じ難いものなのだろうと思い込んでいた節があった。だから、ホストファミリーに対して、神社では旅の安全や家族の健康、事業の成功を祈願し、神社ごとに得意なお願いごとがあるのだと説明したが、同時に異文化すぎて混乱させるだけかもしれないとも思った。けれども彼らは私の説明に対し、確かに神は一柱であると考えているが、教皇や神父には信徒の健康や多幸を祈る役割があり、日本人の行動が理解できないわけではない、むしろ信仰の形は似通っていると知り興味深いと話した。私にはない解釈で、自身の浅慮を恥じ入るばかりである。

少しさかのぼって、同日朝食時のことも残しておきたい。日曜日にザクセン・アンハルト州で州議会選挙が行われるらしく、ココアを片手に少し話をしたのだ。ホストファミリーは極右派政党の躍進を気にかけていて、これは彼らの主観にはなるが、保守的な思想もさることながら住民の生の声を聞くこととい

う極めて意義深い経験をすることができた。なお、この結果は日本でも大きく取り上げられていたので諸兄らもご存じかと思う。機会があればドイツにおける投票行動の先行研究も調べてみたい。

9．最後に

本稿をまとめるにあたり、私が本研修に参加した意義について、印象深い経験で締めくくりたいと思う。

前述のとおり、私はしがない社会人である。この半年間、本研修に参加するため、費用の工面に始まり、仕事、昇任試験の勉強、ドイツ語の勉強、プログラムの準備、新居の契約に引っ越しと、時間や責任に追われながら息つく暇なく出発日を迎えた感覚だった。

その愚痴をホストファミリーにもらしたときのこと。ホストマザーは、私は若い女の子たちのよきロールモデルになると思うし、なるべきだと話してくれた。ドイツも日本も、女性の社会進出にまだまだ伸び代がある中で、追いかけたいと思える人がいるのは後進にとって幸せなことだと。

それは思わず聞き返してしまうほど、私にはない発想だった。なぜなら私は気を抜くと「私が大人になったら〜」と言ってしまうくらい、大人になった自覚がないから。こんな未熟な私を追いかけるなんて、後輩諸共崖から落ちてしまう気さえする。けれど、そんな半端な姿でも誰かの背中を押す力になるのだとしたら、それは確かに私が今、本研修に参加したことの意義であるかもしれないと、腑に落ちるものがあったのも事実だった。

本派遣は、使節団を率いた団長をはじめとする国内外様々な方の多大なるご尽力の賜物である。この場を借りて感謝を申し上げるとともに、両市の深い歴史の一つになれたことを心から誇りに思っている。この素晴らしい友好関係が末永く続くことを願ってやまない。

そして本渡航記が、ホストマザーの言うように尼崎市に住む若い女性にとって何かを踏み出す一助となったのならこれほど嬉しいことはない。それを願って、筆を置くこととする。



（写真：この旅におけるご縁の証。Vielen Dank🌞）